



Title	イーゴリ遠征譚 (訳及び注) (V)
Author(s)	木村, 彰一
Citation	スラヴ研究, 21, 51-54
Issue Date	1976
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5061
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113030.pdf



[Instructions for use](#)

イーゴリ遠征譚

(承 前)

木 村 彰 一 訳

140. イングヴァリよ、フセーヴォロトよ！ またムスチスラーフのみたりのおん子、
賤しからぬ巢に生まれた六翼の鷹よ！ おみたちは不敗のくじもて領国を得たもうた。

140. 「イングヴァリよ、フセーヴォロトよ！」——] Инъгварь (А Ингварь) и Всеволодъ! (РА
) Ingvar' と Vsevolod は、すでに 133 に名前が出た Mstislav Peresopnickij の兄弟で、Jaroslav Luckij の息子たちであることについては諸家の見解が一致しています (La Geste, 132; Lixačev, 447; Obrębska-Jabłońska, 139)。

「ムスチスラーフのみたりのおん子よ」——] вси три Мстиславичи (А Мстиславичи), 直訳すれば「Mstislav の 3 人の息子全部」ということになりますが、この Mstislav がどの人物を指すかについては、昔から説がわかれています。

1) すぐ上に名前が出た Ingvar' と Vsevolod, およびその兄弟の Mstislav Peresopnickij の 3 人を指すとする (N. M. Karamzin 以来の) 説。この 3 人の父は Jaroslav Luckij ですから、Mstislaviči では事実に反しますが、この説の支持者たちは、この父称は 3 人の曾祖父 Mstislav (Vladimir Monomax の子) に由来するものだと言います。こうした点に無理があるほか、Jaroslav Luckij にはもう 1 人 Izjaslav という子があって、Slovo の書かれた当時は存命であったこと、それよりなにより、はじめに 3 人兄弟のうち 2 人だけの名をあげ、ついで「Mstislav の 3 人の息子全部」というふうに言い直すのはいかにも不自然な修辭であることを考えれば、この説は受け入れがたいもののように思われます。

2) Mstislav Rostislavič (“Xrabryj”) の 3 人の子 Mstislav, Davyd, Vladimir の 3 人を指すとする A. Majkov の説。Marc Szeftel もこの説を採用しています (La Geste, 132)。この考えに従えば、上記の 3 人兄弟は、すでに 127 に出て来た Rjurik と Davyd のおいに当たることになります。なお Mstislav Rostislavič については、Ipatij 本年代記 1178 年の項 (除村訳では 462 以下) に記事があります。

3) Vladimir Monomax の曾孫 Mstislav Izjaslavič の 3 人の子 Roman, Svjatoslav, Vsevolod を指すとする Vjazemskij, Ogonovskij らの説。Lixačev (447), Stelleckij (178) はこの説を踏襲しています。Ingvar', Vsevolod と並んで、この 3 人もすべて Volyn' 地方の公であることを考えあわせると、この説はもっとも説得力があると言えましょう。「Mstislav の 3 人の子」とだけ言って名前をあげなかったのは、もし名前をあげると、すでに 133 に出た Roman の名がくりかえされることになるほかに、次にくる《6 翼のタカ》という表現との結びつきが稀薄になるからであろうと思われまふ。つまり私見によれば、後述するようにここでは 3 と 6 という数の対比がもっとも重要な修辭的役割を果たしているわけです。さらにまた Roman の名が出た 133 のすぐあとの 135 で「ラテンの兜」の表現が用いられたのと符節を合わせるように、ここでも次の 141 に「ポーランドの槍」が出てくることは、この説の信憑性をますます確かなものにすると思ひます。

「六翼の鷹よ！」——] шестокрилци! (А шестокрильци,) шестокрильць ないし шестокрильный は天使 серафим の epithet (Sreznevskij, III, 1589 参照) で、すでに 1076 年の Izbornik にも用例が見えています。この語はギリシア語 heksapterugon (または heksapterugos) のなぞりですが、このギリシア語は серафим の異名であると同時にまた серафим の持つうちわをも指していました。ところがそのうちわがやがてタカを意味する俗語 ksephteri の名称をもって呼ばれるようになったところから、ksephteri と heksapterugon は同一視されるに至り、その影響でロシア語 шестокрильць もタカを指すことになった模様です。しかし同時に作者がこの語に元来の《6 翼の》の意味をも付与していたことはあきらかで、つまり три Мстиславичи [...] шестокрилци には《(1 羽 2 枚ずつ合計) 6 枚の翼を持つ (3 羽の) タカ、(すなわち) Mstislav の 3 人の子》という nuance があるわけです (La Geste, 133 参照)。

141. おみたちの黄金の兜，ポーランドの槍と楯とはそも何のため？
 142. おみたちの鋭き矢もて，野の民に閑の戸とざしたまえかし，ロシアの国をば守らんため，スヴァトスラーフの雄々しき子，かのイーゴリが手傷のため。

143. いまははや，スラーもしろがねの流れもてヤロスラーヴリの町びとの目を楽しませずことはない。ドヴィナーの流れもいまは邪教のやからの雄たけびのもと，そのかみ勇名をはせたポーロツクびとのためには沼と変じた。

144. ただひとり，ヴァシリコの子イズラスラーフ，リトワびとの兜めがけて利きつぎの音をひびかせたが，祖父フセスラーフの名をはずかしめたのみか，みずからも，リトワのつぎにはたと打たれて，血に染む草のべの，緋色なす楯のもとにくずおれた，いとしの妻とふしどに身をば投ぐるがごと。

145. さればボヤーン言う。

「おみたちは不敗のくじもて領国を得たのではなかったか」——J непобѣднымн (А не побѣдны-мн) жребін собѣ власти расхытисте. (P ? A ,)—Lixačev (23 f.) は A に従って не побѣдными жребни ... と読み，[но] не по праву побед расхитили [добыли] себе владения! と訳し，Stelleckij (179) は не побѣднымн と読むことは Lixačev と同じですが，解釈は逆で，Mstislaviči は《勝利のくじ》によって領国を奪取した завоеватели ではなく，それぞれの領国の законные наследники なのだ，ととる D. Dubenskij の説に従っています。Lixačev のようにここに Mstislaviči に対する非難の口物を読みとるにしろ，Stelleckij のように彼らの公としての合法性を読みとるにしろ，いずれにしてもつづく J 141 の彼らの武勲を暗示する箇所，ましてや J 142 の Igor' 来援への appeal とはうまくつながらないうらみがあります。背後にある歴史的事実はわかりませんが，それはどうであろうとここはやはり J のように P のテキストを採用し，hyperbolic な修辭によって Mstislaviči の武勲をたたえたものと解釈するのがもっとも妥当であると思われます。なお непобѣднъ 《不敗の》という形容詞は Sreznevskij には見えませんが，Codex Suprasliensis に少なくとも 1 度用いられています (Čiževska, 225 参照)。

141. 「ポーランドの槍と楯」——J сулицы Ляцкыи (P Ляцкии) и щиты. Сулица は両方に刃先のついた短い投げ槍で，ポーランド軍が用いていたものです。ここに《ポーランドの》槍と楯が出てくることについては，Lixačev (448) によれば，Mstislaviči が母方の血筋から言えばポーランド王 Bolesław Krzywousty (1085-1138) の孫であったこと，さらにまたこの Volyn' の公たちが Kiev や Galič の公たちとの戦いにさいして，しばしばポーランドの援助を受けたことを想起する必要があります。

142. 「ロシアの国をば守らんため」以下は refrain で，129, 132 に次いでこれが 3 度め (かつ最後) です。

143. 全体の意味をパラフレーズすると，南ロシアの Sula (これについては 7 および 18 の注を参照) が Perejaslavl' にとってもはや polovcy に対する防衛線ではなくなったと同様に，北西ロシアの Polock 公国においても，敵たる litovcy が境界線の Dvina まで攻めよせた結果，この河はその岸における litovcy との戦闘で流された血のために重くよどんでいる，ということになりましょう。

「スラーも……ヤロスラーヴリの町びとの目を楽しませることがない」——J Сула не течеть (P течеть) ... (РА къ граду Переяславлю (А Переяславлю), 「ドヴィナーの流れも……ポーロツクびとがためには沼と変じた」——J Двина болотомъ (P болотомъ) течеть ... Полочаномъ (P Полочаномъ). РА къ граду Переяславлю の къ は下の Полочаном との対比から，後代の interpolation と考えられます。なおこのふたつの与格は dativus commodi ないし incommodi ととるべきでしょう (La Geste, 194 の Jakobson の訳では ... Сула не струится ... на радость Переяславлю-граду; ... Двина у Полочан ... тиной течет)。これを《……の方へ，……をさして》と訳すことは無理だと思われます。なぜなら Polock は Dvina にのぞんでいます，Perejaslavl' は Sula の北西にある Trubež の流域の町だからです。なお Lixačev (24) は РА къ граду Переяславлю の къ を生かして，しかも для города Переяславля と訳していますが，この訳は少々無理かと思われます。

144-145. 「祖父フセスラーフの名をはずかしめたるのみか、みずからもリトワのつるぎにはたと打たれて、血に染む草のべの、緋色なす楯のもとにくずおれた。いとしの妻とふしどに身をば投ぐるごと、さればボヤーン言う」——*Ј притрепа славу дѣду (А славудѣду) своему Всеславу, а самъ падъ (РА なし) подъ чръленими щиты на кровавѣ (А накровавѣ) травѣ, (РА ,なし) притрепанъ Литовскими мечи, (РА .) аки (РА И) с хотию (РА схоти ю) на кровать. (РА .) И рекъ (А ирекъ) Боянь (РА なし).* 古来 *неясные места* のひとつとされている箇所。Jakobson の *emendation* のおもなものは次の3点です。1) 前置詞 *подъ* の前に能動完了分詞 *падъ* を挿入したこと、Jakobson は、がんらいあったと考えられる *падъ* が後代のある時点で *scribe* によって見落とされたのは、次の *подъ* と外見上似ていること、および述語動詞(ここでは *притрепа*) + 接続詞(ここでは *а*) + 能動分詞(ここでは *падъ*) という古い語法が忘れられたこと、のふたつの理由によるものと推定しています (La Geste, 90)。2) *РА И схоти ю* を *аки с хотию* と改めたこと、ただし Čiževska, 399 所載の、1964 年の Jakobson の再構テキストでは *аки* を *чи* に改められていますが、全体をひとつの比喩と見る点は変わりがないわけです。なお戦士の死の《床》と結婚の《床》とのこの対比については 73 「いさましきロシアの子らは、婚礼のうたげをとじた。縁者らを酒にあかせて、みずからはロシアがためかばねとなって野に伏した」(Ту пирь докончаша храбрии Русичи: сваты попоиша, а сами полегоша за землю Рускую) を参照。3) *さいごの и рекъ* のあとに *Боянь* を挿入したこと、これは F. Korš に拠ったものですが、209 に *Рекъ Боянь* とあるのがこの挿入の重要な根拠になっています。なお Jakobson は、完了分詞 *рекъ* (がんらいは *реклъ*) は述語動詞 *притрепа* よりさらに以前の時をあらわし、従って *рекъ Боянь* は「*Боянь* がすでに予言していた」と *paraphrase* できると考えています (La Geste, 91)。

上掲の箇所を Lixačev (24, 449) は I. D. Tiunov とともに次のように読んでいます：*притрепа славу дѣду Всеславу, а самъ подъ чръленими щиты на кровавѣ травѣ притрепанъ литовскими мечи и с хотию на кров, а тьи рекъ.* 同じ Lixačev の現代語訳は *притрепанъ литовскими мечи и с хотию на кров, а тьи рекъ.* 同 *Лихачев* の現代語訳は *притрепанъ* 以下は次のようです：*был прибит на кров мечами литовскими со своим любимцем, а тот и сказал.* つまり *хоть* を男性の *любимец* と解し、*рекъ* の次にある句をその *любимец* の言った言葉と解するわけです。かなり魅力的な読み方ですが、《血に染んだ》という形容詞と《血》という名詞が並んで出てくる点に Slove の作者に似つかかわしくないぎごちなさを感じられ、これがこの読み方の最大の難点といえましょう。

ところで、Slovo 144, 147, 148 のテキストの背景をなす歴史的事件については、ほかの注釈者たちは黙して語りませんが、ただ M. Szeftel (La Geste, 135) のみは、これが 1162 年に起こった Gorodec の戦闘中のあるエピソードを素材にしたものと断じ、Ipatij 年代年 1162 の頃から次のような記事をひいています：*「Rogvolod (Borisovič) は Volodar' を攻めるために、Polock の人びととともに Gododec に (к Городцю) 到着した。しかし Volodar' は日中は戦いをしかけず、夜中になってからリトワニア人たちとともに (с Литвою) 町から出て彼を攻めた。この夜多くのわざわいが起こった。ある者は殺され、他の多くの者は [...] 生けどりにされた [...] Rogvolod は Polock へはあえて行かなかった。なぜなら Polock の人びとが多数戦死したからである。そこでポーロックの人びとは Vasil'ko の子 (Василковича) Polock 公にすえた…」*(かつこの中は筆者の補足—S. K.)。つまりこの記事は Rogvolod Borisovič および Polock 人の連合軍と、Gorodec 公 Volodar' およびリトワニア人の連合軍との間で行なわれた Gorodec 城外の夜戦で Rogvolod 軍が大敗を喫したこと、このあと Vasil'ko の子 (M. Szeftel はこれは Vseslav であると推定しています) が Polock の公となったことをのべているわけです。ところでここに出てくる Vasil'ko Rogvolodovič (Polock 公 Vseslav Brjačislavič の孫) には Volodša, Brjačislav, Vseslav の 3 人の息子がいたことが年代記によって知られますが、Slovo のあげている Izjaslav は年代記には見当たりません。しかし M. Szeftel は、Vasil'ko には上記 3 人のほかにもうひとり Izjaslav という息子がいて、これが Rogvolod 側について Volodar' 軍と戦い、リトワニア人に討たれて戦死したのではないかと推定しています。もしこの推定が正しいとすれば、Slovo 144 の Vasil'ko の子 Izjaslav がリトワニア人と戦い、「リトワのつるぎに打たれて」死に、「祖父 (実は曾祖父) Vseslav の名をはずかしめた」という記述、147 のその場には兄 Brjačislav も、もうひとりの兄 Vsevolod もいなかったという記述、148 の「Gorodec にラッパの音のみかしましい」という記述は、すべて年代記の記述とびたりと合致するわけです。なお M. Szeftel (La Geste, 136) は年代記の Volodša は Slovo に出る Vsevolod の diminutif であると考えていますが、この意見は正しいと思われ、Stelleckij (183) も同じ考えを述べています。また Slovo 148 の上掲拙訳の原文は *трубы трубят Городеньскіи* ですが、この形容詞のもとになった地名はもし Slovo, 144-148 の記事と Gorodec の戦闘とを結びつける M. Szeftel の推定が当たっているとすれば、(多くの注

146. 《公よ、なんじの従士らは、鳥の翼もておおわれ、けものに生血を吸われた》と。
 147. その場には、兄ブリャチスラーフも、次の兄フセーヴォロトも姿なく、おんみのみ、ただひとり、黄金の首飾りせきもあえずに、雄々しき身から真珠の御魂をとり落とした。
 148. もろ声はもだし、楽しみは消えた。——ゴロデツにラッパの音のみかしましい。

〔附記〕 本稿は文部省科学研究費による研究成果の一部である。

釈者があてずっぽうに推定する仮定の Городно, Гродно, Городен などではなく) まさしく Gorodec でなければなりません (Stelleckij, 184, も V. E. Danilevič とともにある程度この考えに傾いていますが); ただし Stelleckij は Slovo の記述と年代記の記載のかかわり合いをまったく無視していますが)。勝ちほこる Gorodec 勢が高らかにラッパを吹きならすのは context から言ってもきわめて自然です (18 трубы трубятъ въ Новѣградѣ 参照)。この1句を Lixačev (95) が в знак сдачи города と説明し, Stelleckij (183) В знак траура по князю горожане затрубили в трубы と説明しているのは不可解というほかありません。なお M. Szeftel (La Geste, 136) によれば, Gorodec は現在 Gorodok Solomireckij の名で呼ばれる村で, Minsk の北 15 キロの地点にあります。

146. 「なんじの従士らは、鳥の翼もておおわれ」——J Дружину твою, (A , なし) княже, (A , なし) птицъ крилы приодѣ. Lixačev は, ある種の猛禽は戦場で死体を見つけると, その死体の上に舞いおりて, 翼をひろげてそれを《おおいかくし》, 他のけものや鳥に対して, えものに対する自己の権利を示す, という N. V. Šarleman' の所説を紹介しています。

147. 「その場には兄ブリャチスラーフも, 次の兄フセーヴォロトも姿なく」——J не бысть (P не бысь, A небы) ту брата Брячяслава (A Брячяслава), ни другаго—(PA —なし) Всеволода: (PA;) Brjačislav と Vsevolod についてはすでに上で説明したとおりです。

「こがねの首飾りもせきあえず」——J чресъ (A чрезъ) злато ожереліе. Lixačev (449) は, 《злато ожерелье》というのは公の衣服の, 金や宝石をちりばめた円形ないし四角のネックライン (вырез) であると説明しています。

148. 「ゴロデツにラッパの音のみかしましい」 この1句についてはすでに上で説明したとおりです。